

NP による居宅終末期ケアの有用性と課題に関する文献レビュー

○大釜 信政（帝京科学大学）

I. はじめに

超高齢・多死社会に突入した日本では、住み慣れた場での療養生活の継続や看取りが可能になるよう、訪問系の医療・介護サービスの拡充が必要である。米国では、一定の範囲で自律的に診療できる Nurse Practitioner（以下、NP）による緩和ケアが着目されており、訪問診療スタッフと連携しながらアドバンスケアプランニングや苦痛緩和に関与する在宅プログラムも存在する。日本では、2008 年から看護系大学院で NP の養成を開始したが、その歴史は浅く、保健師助産師看護師法に基づき医師の包括指示により特定行為の実施は可能であるものの、看護師が自らの判断と責任の下で診療することはできない。こうした状況にある日本においては、NP による居宅終末期ケアに関する研究成果は少ない。

そこで本研究では、国内外の文献を精読し、NP による居宅終末期ケアの有用性や課題について明らかにすることを目的とした。

II. 研究方法

1. 文献選定方法

国内文献の選定においては、医中誌 Web を利用して「診療看護師」or「ナースプラクティショナー」or「高度実践看護師」and「プライマリケア」の検索式を用いて、「原著論文」「解説・総説」に絞って検索した。国外文献の選定では、PubMed を用いて「nurse practitioner」「home」「hospice」「end-of-life」「care」のキーワードで AND 検索した。国内外の文献の中から、タイトル、抄録、キーワードに加えて、必要に応じて本文も確認し、NP による居宅終末期ケアに関する実践内容、有用性、課題が記述された原著論文・実践報告・解説論文を選定した。

2. 分析方法

NP による居宅終末期ケアに関する実践内容、有用性、課題に該当する記載箇所を抽出し要約した。要約内容の類似性に従ってカテゴライズし、特徴を反映できるラベルを付けた。

III. 結果

上記の選定方法を経て、アメリカ合衆国 8 編、オーストラリアと日本がそれぞれ 2 編、カナダとイギリスは 1 編ずつ、合計 14 文献を分析対象とした。

NP による居宅終末期ケアとして、[アドバンスケアプランニング][症状の客観的評価と緩和][連携・協働][助言・教育][倫理面を重視した実践]が明らかになった。[終末期ケアへの円滑な移行][ケアの質の改善][療養者・家族の心身の安寧の向上]といった有用性が認められた。課題として、[制度・政策][役割に対する不明瞭な期待][労働環境に伴うケアの限界][信頼関係の構築][教育・研修]に関する内容が明らかになった。

IV. 考察

NP は、積極的に意思決定支援に携わり、症状緩和のための薬剤処方や処置を実施し、多職種連携の促進にも貢献している。NP を活用することにより、終末期ケアへの円滑な移行が可能となり、ケアの質の改善や療養者・家族の心身の安寧の向上にもつながっている。一方で、NP がこれまで以上に患者・家族のケアニーズに対応できるよう、NP の役割を強化するために制度を改善していくこと、適切なスタッフの配置などの労働環境の改善、NP の知識・スキルを向上させるための研修プログラムの開発といった課題が示唆された。